

「こうさい療育・支援セミナー」実践報告Ⅰ

『親を生きる』を支える～児童発達支援センターにおける親支援の実践～

堀 由美

はじめに

「発達支援」という概念が提唱されたのは、平成15年・16年度の厚生労働科学研究において分担研究された「障害児通園施設の機能統合に関する研究(主任研究者:岡田喜篤)」においてと言われている。この研究報告にて「療育」という概念を、それまでの肢体不自由児を主な対象としたチームアプローチによる治療教育的支援のそれから、障害の確定されていない子どもにまで対象を拡大し、育児支援や家族支援、障害があっても育ちやすい、暮らしやすい地域の開拓といった地域支援の概念までも包含したものに発展させたことは大きな転換であったのだろうと考える。

当園でも児童発達支援センターが開設されてから丸7年が経過しようとしている。この間、単独通園クラスでは69名の子どもと出会ってきた。日々子どもと向き合い、絶対的な子どもの変化・成長・発達を目の当たりにしてきたのだが、就学を前に『これから先の生活にはいろいろな困難があるかもしれないけれど、でも、きっと大丈夫』といった思いを抱くことができるのは、その子自身の変化・成長・発達だけに依るものではなく、実は「親の育ち」が欠かせず、その実感・実態こそが鍵になっていくと思わされた7年の経過でもあった。

そこで、今回の報告では、この7年の経過の中で出会ったある一人の母親にスポットを当て、その歩みを共に振り返る作業を通して「すきっぷ」における親支援の実際とそれが母親の内面に何をもたらすことになっていたのかについて紹介し、早期療育を単に「場や機会の提供」に終わらせることなく、『親を生きる』ために何が大事になっていくのかを考えたい。なお、対象とした親子は単独通園クラスに所属していたため、今回の報告は単独通園クラスでの親支援を軸としたものになることをご了承ください。

Ⅰ 「すきっぷ」の療育について

弘済学園児童発達支援センター「すきっぷ」(以下、「すきっぷ」とする)は、2016(平成28)年に開所し、集団療育(10名定員、2クラス。以下、「単独通園」とする)からスタートし、2019(令和元)年に親子通園を開設してきた経緯がある。

単独通園は毎日通園のみとし、9:00～14:00の支援時間としており、担任との信頼関係をベースに、無理なく十分に楽しめるプログラムを提供しながら、集団展開に導入する中で、子ども同士がお互いに意識し合い、学び合い、高め合う力を育むことを期待する。生活習慣の整え、適切なコミュニケーション方法の獲得、興味・関心の広がり、発達段階に応じた活動や教材の提供による能力開発等を図ることを目標としてい

る。

親子通園は毎日通園を基本とし、9:30～13:00の支援時間としており、親子の愛着を深め、親子間の信頼関係が築けるようにし、前向きな気持ちで子育てしていけるように、親子に焦点を当てて支援を進めることを配慮している。

「すきっぷ」の療育において、単独通園、親子通園共に、支援のコアは『構造化支援』と『心育て』にあると言ってもよいだろう。この言葉は、こうして文字にすると平たいが、クラス担任として10名いるスタッフの内、6名が入所支援の経験者であり、『24時間体制の支援の下で、子どもの育ち・発達を、生活を丸ごとで見る』という視点をもって療育と向き合うベースがあることが大きいと考える。子どもの生活の一部分、能力の一部分を取り出してその児を見ていくという視点ではなく、更には幼少期だけではなく、児童期、青年期と育ちゆく子どもたちとの出会いの中で、その成長・発達のプロセスを直に知るからこそ、幼児期が「人としての育ちの土台」となることを、身をもって知ることに繋がっているのだと考える。更に、その「人としての育ちの土台」を作る幼児期は、親の見方・捉え方が子どもの育ちや親子関係に具体的に作用していくことを発達支援に携わる者であれば周知の通りであろう。「すきっぷ」では、ここに早期療育・早期介入の肝があると捉え、この意図を療育実践してきた経過がある。

単独通園クラスにおける『構造化支援』と『心育て』の構図をもう少し詳しく解説すると、以下の様にまとめられるのだろう。

- ・構造化支援により園生活に見通しを持ちやすくする環境を保障することが、子どもにとっては「分かる」という安心感をもって生活できることに繋がる。
- ・この構造化支援からの安心・安定が、個の「分かり方」という認知・認識の段階に応じた理解を下支えしながらその発達を促す。
- ・併せてその認知段階に応じた対人関係を意図していく。
- ・更に、その関係性が深まりゆくベースにも構造化された配慮が作用していくことで、その関係性の発達も健康的な方向に進む。

この流れを深めていくことが子どもの『心育て』に繋がっていくという構図である。

また、「すきっぷ」では、この『心育て』においては「認知」、「情緒」、「意欲」の三つが紙縊りのように育ちゆくことを大事にしたいと考えている。子どもは、生後1年間の乳児のうち、人から学ぶことはせず自ら学ぶ存在であるが、生後1年以降は人から教えられることを通して学ぶ存在に変わっていくと言われている。まさしく幼児期は他者との「共有・共感」なくしては、本来的な発達はあり得ないと言えるのかもしれない。だからこそ、「すきっぷ」では子ども自身がまずは大人と一緒に実体験することを大切にしており、具体的に子どもの発達を支援していく手段として、「からだ」にアプローチするプログラムを基軸としている。

例えば、粗大運動を考えてみると、子ども自らが、自分の身体を使い主体的に物事に関わっていくことが自分の身体を理解することに繋がり、あらゆる物事には起点と終点があることを理解し、自分を取り囲む物事には因果関係があることへの理解の基礎を、自分の身体を使って学んでいくプロセスが存在していることが分かる。

更にその粗大運動をプログラムとして集団展開していくことは、社会性の育ちに繋がっていくであろう基礎的なルールを学ぶことにも繋がり、それを体得する過程においては、大人とのやり取り抜きには成立しないのが幼児期の集団展開である。子どもが主体的に活動するに至るとき、初めは大人を見て学び、その過

程の中で認められ、褒められ、励まされながら自らを発達させていき、その中で情緒的な育ちや意欲、自信、根気強さといった気持ちも育まれていくことを実感している。

『構造化支援』と『心育て』という言葉を並べると、一見相反することのように思われるかもしれないが、決してそのような二対関係にはなく、『構造化支援』を助けに関係性を基軸にした営みがしっかりと底通しているならば、共有体験・共感体験の中で子どもの『心育て』の道のりがあるのだと考える。

そして、そこに親への支援も併せて進めてきたこれまでがあった。以下に掲載するものは「すきっぷ」単独通園のクラスにおいて親と接する際に配慮したい点として設定され、「すきっぷ」の療育・支援要綱に当たる「乳幼児期の発達支援のすすめ方～『すきっぷ』の取り組み～」に記載されている内容となる。

「親は、単独通園になった子どもの姿を直接見ることはできません。そのため、降園時に見せる子どもの表情、様子を通して「すきっぷ」での子どもの様子を想像できるようにしていきます。そのためにも、職員との対話や面談、連絡帳を介したやりとりを重視し、子どもの姿を描けるようにしていきます。

ここで大切なことは、職員と親との信頼関係を基盤としたコミュニケーションです。日々の子どもの姿を共有することを通して、子どもの育ちを確認しながら進めていけるようにしたいと考えています」

更に、単独通園における親の目標としては、以下の4点をあげている。

- ・職員とのやりとりを通して、子どもを捉える。
- ・子どもの姿を通して、「すきっぷ」での子どもの様子を想像する。
- ・親なりのやり方を掴み、実践してみる。
- ・関わりを振り返りながら、関わり方を模索し、自ら修正する。

そして、親としての育ちを支えるということについては以下のように結んでいる。

「親子関係は、相互作用するもの、すなわち、自転車の両輪のようなものです。そのため、親が子どもを正しく知り、育てに対してしっかりとした考えを持たなければ、子どもの育ちがよりよいものになることはないでしょう。そのため、「すきっぷ」では、親が『その子なりの人生を歩む姿を見ること』ができるように、親の育ちを支えていくことを目指します。

その過程において、『障害があろうとなかろうとも、我が子の生きようとしている姿をしっかりと受け止め、その子育てにじっくりと関わることが大切だ』と気付けるように親を支援していきます」

実のところ、具体的な親支援としては、コロナ禍において中止、中断の機会も多く、変えざるを得ない3年間であったが、変えてきたことばかりではなく、敢えて変えずにきたこと、中身を整理し直したこと等、これまでの支援を振り返る期間にもなったと評価している。その代表的なものを一つずつ挙げるとするならば、

① 登園時、降園時の保護者との伝達は省略・簡素化しないこと

親とのつながりをより密に持つことを意図し、具体的な様子やエピソードを共有しながら、その見立てや読み解き、そこから気づかされた子どもの内面等を共有していくことを優先してきた。

② 親教室の中身の見直し

それまでの親教室は生活リズムや ADL といったことから、障害や子どもの発達をその種別ごとや領域ごとに学ぶこと等幅広く進めてきた。その中で、特に発達についての学び方について、領域間のつながり・連

関を意識できるよう意図し、障害から子どもを見るのではなく、我が子の姿や発達から障害に気付いていけるような進め方、学び方を試行した。親は子どもの育ちや発達にはプロセスがあるということを学んでいく中で、常に我が子の姿を思い浮かべながら聴いているからこそ、そこから落ちてしまう姿や浮きこぼれている姿に気づき、その姿こそが実は我が子の困り感や特性に通じていくことを感じ取っていくプロセスがあるのではないかと考えての見直しであった。

以上の2点にあったと考える。

II Aさんの親としての3年間の歩み

今回、ご協力頂いた母親 A さんは、このコロナ禍に入園し、ちょうど3年目を迎えた年長児の母親である。入園してから今日までの日々をどのように受け止めてきたのか、我が子との毎日の中で何を感じ、そして自分自身の思いとどう向き合ってきたのか等について対話を通して語ってくださった。以下に記載したものは、その内容になる。なお、網掛けされた部分は、A さんの話を聞く中で筆者自身を感じた「A さんが、親として生きる上で鍵となった感情や気持ちの節目だったのではないかと主観する箇所である。

○入園する前のことについて

- ・子育て広場にも集っていたが、他の子との違いを感じていた。一人遊びが多く、寝転んでミニカーを走らせたりしていた。私とはコミュニケーションを全くとろうとしないけれど、職員からの関わりには片言を交えて応じてみたりすることもあったし、職員とはコミュニケーションを取ろうとする様子も見られていた。でも、外に目を向けられない子なんだということがよく分かった。言葉を喋ってはいても、意思疎通できない感じが拭えず、『指差し』は全く無かった。私が指差しして何かを見せようと必死になっても、全く違う所の電球を見て「にこ〜っ」としていたりして違和感が拭えなかった。
- ・1歳半で市の保健師に相談したものの、市としては2歳からでないと動き出せないと言われ、2歳になるまでは様子を見ることになってしまった。
- ・2歳になり、言葉の相談室で発達検査をすると、結果としては意外と良かったようだったが、「間口の狭い子」と説明された。検査を担当した心理士による月に1回の個別療育につながると、実際の様子と検査結果との違いが大きかったようで、「すきっぷ」を紹介された。
- ・見学した意味はとても大きかった。実際に見学して、子どもたちが自分で動いている姿を見て驚いた。
- ・このころは、関心のあるジャンルであれば言葉が出始めてきた時期だったので、正直「すきっぷ」と幼稚園とどちらがいいのだろうと悩んだ。幼稚園にも申し込みをしていた。幼稚園で定型発達の子どもたちと交流した方がいいのかもしれないと揺れに揺れた時期だった。
- ・周りからも『大丈夫よ』とも言われたりしてもいた。全然大丈夫じゃないのにな・・・と思いながらも、そうかな、とも思ったり・・・。
- ・でも、見学で生の子どもたちの姿を見て、「うちの子も、こうなるのかな・・・」と思えた。
- ・見学の際、子どもの様子を見ながら実例を挙げての説明や、やっていること、取り組んでいる活動の意味を説明してもらったことも大きかった。何気なくやっていること全てに意味があったのには驚きだった。
- ・療育の方に入園したいけれど、「入園できます」という返事がきたら、それは「障害がある」ということを認められてしまったということだな、と思い、入園できる嬉しさと同時に、揺れた自分もいた。

・そんなとき、夫から「何を悩む必要があるの？療育に何のデメリットがあるの？」と言われ、その一言で「本当にそうだな。なんのデメリットもないな」と思い背中を押された。入園を決めてからの迷いはなかった。

○入園した当初の思いについて

・「ここに行ったら、奇跡が起こるかも」「ここに居れば治って、普通学級に行けるかも」「ここに来たら、食べてくれるかも」といった思いがあった。

・市の療育は母子通園で、「私がいると、なにも変わらないんじゃないか」という思いが正直あった。毎日の単独通園になることで、「子どもを変えてもらえる」という思いが正直あった。

・入園した後は、すぐに変わるんじゃないか、すぐに食べるんじゃないかと思っていた。でも、全然できない我が子がいて、期待とは違った。

・担任から聞く言葉が、「お茶が飲めないんです」とかの類の言葉だったことを思い出す。

・全くお茶を飲めない姿や、給食に全く手を付けない姿を通して、担任からの報告を通して、自分が思っていたよりも、この子はなかなか手ごわい子だったんだな、と実感した。

・奇跡が起きることを信じて入園したのに、そんな奇跡は起こらず、それどころかお茶さえ飲めない我が子がいた。そんな状況に、できない事にばかり目がいていた自分がいたが、そのことを担任はよく分かっていたのと思う。当時は担任からの伝達の際、「一喜一憂しないでね」とか「落ち込まないでね」ということをよく言われていたことを思い出す。子どもがどれだけ頑張っているのかということも話しにあったけれど、当時は、担任からの報告を受けても、自分で考えることはできなかった。焦っていた。

・今思うと、この頃は我が子のことをまだ受け入れていなかったのかもしれないな、と思う。3年間通う中で、色々なことを経験していく中で、私が変わったのだと思う。

○食事や排泄面、親子関係など～辿ってきたプロセスを思い返して

・家庭以外で食べることがなかったのも、他の場所で親以外の人とどういふ様子になるのかを全く知らなかった状況ではあるが、いくら偏食の強さがあるとは言っても、ここまでだったんだという衝撃があった。すきっぷでも駄目なのか・・・と。

・周りの子ども偏食の強さが課題にあったが、それでも変化していく姿があつて、「周りの子に追い付いてほしい」「なって欲しい」、「出来て欲しい」といった思いばかりが強くて、当時は毎日が焦りばかりだった。毎日の伝達・報告を聞いては落ち込むことを繰り返していたと思う。

・でも、本人の気持ちに寄り添っていた訳ではなく、『どうしてできないの?!』という思いの方が強かった。

・ただ、そんな中であつても、我が子と担任との関係性は深まっている事実があつた。親がもがきつつも、担任との関係の中では本当に少しずつ変化が見られ始めていた。今思うと、とても大きい変化なのだが、当時の私はその歩みにももどかしさを感じてしまった。

・水筒に口をつけてみた、一口飲んだ、給食を触った、家から持ってきたご飯だったら食べるかもということでジャー付きの弁当箱を用意した等、本当に小さなことからちょっとずつ変化してきた。

・私自身の変化のきっかけは、我が子の変化。その中で、担任との話しの大切さを実感した。我が子に合う接し方を少しずつ考えるようになった。

・でも、頭では分かっているけど、実際に行動に移すことの難しさがあつた。というよりも、まだ子どものことを認め切れていなかったのかもしれない。受け入れることには、自分がやってみて、子どもができるようになった

という私自身の成功体験があったからだと思う。年長のトイレトレーニングを通して我が子と向き合ってきたこと。これは大きかった。

・(トイレトレーニングは)3年目の正直ではないけれど、やっていくことを決意した。私自身が立ち向かうことを決めた。それまで、すきっぷではオシッコ成功できていても家ではオムツで、トレーニングしてみるものの上手く進まずにいた。「私が変わらなかったら、この子はそのまま(オムツのまま小学校に)行くな」と思い、「本当に向き合わなくちゃ」と思った。それまでは、失敗すると私が諦めていたが、諦めない私がいた。

・(トイレトレーニングをきっかけに)それからは親がやっていかなければ、我が子にとって一番いいやり方を知らなければと実感し、自分から担任に相談することが増えた。

・担任との話しが大事だった。

・ノートの活用(家でのスケジュールや予定をノートに文字で書いて提示していく)も大きかった。我が子の反応の変化に親としての手ごたえを実感した。

・うちの子はこういう関わり方が嬉しいんだな、と実感した。この手ごたえは今の私の宝になっている。頭で分かることと自分でやってみての実感の違いは大きかった。

・ノートを活用する前は、絵カードを避けていた自分もいた。言葉だって話しているし、「今日は〇〇だよ」と話せば「〇〇だね」とそれなりに分かってくれていたから。でも、実際にやってみると、笑顔で反応する我が子がいた。ちゃんと理解する我が子がいた。その我が子の姿に手ごたえを実感した。それまでの分かり方は別物だった。子どもの方から「お母さん、今日は〇〇だよね」と言ってきたりして、『子どもにとって』ということをしていくことがどういうことなのか良く分かった。自分自身の成功体験が、自分が変わるきっかけになっていることを思う。

・子どもの姿を見て、自分が変わったんだと思う。

・夫の存在も大きかった。協力してくれるから気分転換できる。『週末はパパとお出かけ』がルーティンになっていて、ワンオペ育児だったら変われなかった自分がいると思う。協力があつたから、ここまで注げたと思っている。

〇親としての自分について

・私自身が変わったのだと思う。子どもにも気持ちがあることを知った。例えば、絵カードのやり方は「スキル」だけど、スキルではない「気持ち」や「思い」も大事だということを、私は全く分かっていなかった。この子の思いに気付けたことが大きい。思いは誰にでもある。この子にだってあることに気づけた。

・我が子を障害や特性から見るとは、思いの表現の仕方が独特なこの子と思えるようになった。それまでは、障害特性といった方向から考えがちな自分がいたが、状態の揺れやマイナス行動の背景が、妹への嫉妬・やきもちだったことがあった。その時の子どもの行動や気持ちを担任が説明してくれてそのことが分かった。マイナス行動、障害からくる特性といった捉え方ばかりするのではなく、嫉妬ややきもちが誰にだって生じる自然な感情だな、と素直に思えた。行動が、気持ちや思いから来ってしまうのだったら『大丈夫だよ』と受け止めてあげられると素直に思った。子どもの気持ち・心を見ていくことが大事なんだということに気付けた。

・以前は、子どものことが分からなくて、逃げる・避けることをしていた。諦めていた。

・今は、原因を知り、「大丈夫だよ」と受け止めつつ、向き合っていくことを選んでいる。向き合うことが大事なんだと思えるようになった。担任に聞いて、逃げないで、解決の道を探る感じ。向き合うことの大変さを感じつつ付き合っている感じ。以前は諦めていたけど、今は諦めずにチャレンジする。でも、解決だけを求めて

しまうと、子どもの気持ちが置いてきぼりになるので、そのバランス取りを忘れてはいけないと思っている。私だけでなく、親子一緒に頑張ることが大事だと思っている。

○これからの子育ての中で、大事にしていきたいこと

- ・親子で頑張っていくことだと思っている。親が正しい頑張り方をすると、応えてくれる我が子がいる。正しく接すると、にこ〜っと笑って、落ち着いてくれて、自分から行動してくれる我が子がいる。
- ・褒めることも忘れてはいけないことだと思う。でも、つい忘れがちな自分がいる。
- ・我が子の気持ちを見ていこうと思う。出てくる行動の根底にある気持ちに気付くことが大事。向き合っ関わっていかないと気付けないので、我が子のことをよく見ていかないといけないと思う。
- ・でも、親のペースで解決を焦ると、子どもがおかしくなる。受け止めていくバランスが大事なことも分かった。
- ・受け止められていると、そのことを子どもも分かるのだと思う。「ぼくのことを見てくれた」という思いがあるように思う。

○日々の伝達はどのような存在だったのか

- ・大事だった。
- ・妹が幼稚園に通っているのも、もし幼稚園に通っていたら、こういった伝達時間は全く無いことも分かる。
- ・伝達では、本当のことを言って欲しい。親は担任から教えてもらうことは多い。担任によって見方というか捉え方が違うこともあるんだな、ということもあったけれど、その時その先生には、うちの子の姿がそう見えていたんだなと解釈もできるし、そう見えたことも事実なんだと思う。家と集団生活との違いがあるのも事実だし、子どもの良いことだけではなく、弱いところや苦手なところも伝えて欲しい。
- ・伝達の中で、相談することで前を向けてきた。療育は、子どもが 5 時間過ごすだけの場ではなく、私が成長するきっかけになったのが伝達だったと思う。これがなかったら、親として成長できなかった。
- ・園との距離感が近く感じたし、今日はどんな話ができるかな？と楽しみだった。

○親実習はどのような存在だったのか

- ・大きかった。我が子のクラスでの様子、気持ちをよく知ることが出来たし、実習を通して、自分の視点も変わっていった。
- ・一年目の実習では、できていないことに目線がいくばかりだった。二年目では、担任がどんな声掛けをしているのか、出来ない時や困っている時にうちの子はどんな表情をしているのか等に気付こうとする自分がいた。三年目では自分の目が変わったことを実感した。担任の対応にどんな意味があるのか考えて見学するようになった。
- ・実習後の振り返りや実習ノートのやり取りも大事だった。ノートで返ってくる担任からの説明や見方に納得もした。

○親教室はどのような存在だったのか

- ・勉強になった。

- ・担任から聞くのは子どものこと、子ども本人の具体的なことが主になっている。親教室では、赤ちゃんの頃からの育ちのことや発達の色々なこと。教えてもらうことで「そうだったんだ」と思えた。皆知らないで「すきっぷ」に通っているんじゃないかと思う。勉強する中で、受け入れられるようになってきた面もある。障害を受け入れることの一つにもなったのが親教室だった。病院で「あなたのお子さんは〇〇です」と診断をもらうよりも、少しずつ知る中で、「ああ、うちの子は〇〇なんだ」と受け止めていくことが出来た。
- ・母親同士で話し合え、「親あるある」の共有も大きかった。

〇3年間を振り返って思うこと

- ・療育を選択して良かった。でも、これも「出会い」だなとも思う。良い出会いがあったから、良かったと思えているのだと思う。でも、どの療育でも今の自分になれたかは分からないとも思っている。
- ・親が送迎することの大事さも分かった。帰りの車中でのやり取りは二人だけの時間になっている。とても大事だったな、と思う。車中での二人の会話の大切さも味わっている。
- ・3年通ったが、3年必要だったと思う。2年だったら、ここまで変われなかったと思う。自分の気持ちを変えるのに3年必要だったと感じている。
- ・私が変わらなくっちゃ！と思えたが、そういった思いは自然形成されるわけではないし、自然と良好な親子関係が築けるものではないと気付いた。「私は、親なんだから」と思えるようになった。
- ・入園当時、奇跡を信じていた私だったけれど、奇跡なんてなくて、親として向き合うことを教えてもらった。目の前のことから逃げずに、でも見つめ過ぎずに、ひたすら向き合うことでしか前に進めない。
- ・人に愛される子になって欲しい。どんな形になるかは分からないけれど、子どもなりの自立もしてほしい。親としてのその願いのために、今向き合おうとすることが必要で、今関係づくりをしないと後から大変になると思っている。
- ・親が育てていくんだ、親が教えていくんだということを避けてはいけないと思っている。一を聞いて十を知る子ではないからこそ、一つひとつ教えていくことの必要がある。見て見ぬふりをしてはいけないと思った。でも、教えるためには子どものことを知っていないと教えられない。子どもを知ることの大切さを本当に思っている。

Ⅲ Aさんの言葉を概観する中で分かること

先のⅠ章では「すきっぷ」単独通園における親支援について触れ、Ⅱ章ではAさんが我が子の療育を通じて親としての自身と向き合うに至った3年余りの歩みを、聴き取ったAさんの言葉をもって紹介した。ここで改めてAさんが辿ってきたその歩みを、Aさんの言葉を用いて継時的に繋いでいく。併せて、その継時における子どもへの発達支援や子どもの変容、Aさんへの働きかけも記していくと以下ようになっていき、その流れは『我が子の特性(障害)を受け止め、親として向き合うに至ったプロセス』として概観できることが分かる。

Aさんの言葉

Aさんへの支援や後押し

「他の子との違い」「違和感が拭えなかった」
（入園は）「障害があると認められてしまうこと」
「揺れに揺れた時期」

夫の一言「療育に何の
デメリットがあるの？」

入園 ↓

「奇跡が起こるかも」
「治って普通学級に行けるかも」
「子どもを変えてもらえるという思いがあった」

日々の伝達で
ありのままの姿の共有

↓

「思っていたよりも、手強い子だったんだ」
「奇跡を信じて入園したのに、奇跡は起こらず」
「焦っていた」

子どもへの発達支援

- ・構造化をベースにした
安心へのアプローチ
- ・安心をベースにした
認知へのアプローチ
- ・認知段階に応じた
関係へのアプローチ
- ・集団展開を軸にした
身体へのアプローチ

↓

「追いついてほしい」「できて欲しい」
「どうしてできないの？」

大人からの承認を得ながら、子
ども自ら主体的に活動する中で
「認知」「情緒」「意欲」が育ち、
子どもの心育ちへとつながる

↓

「本当に小さなことからちよつとずつ変化」
（変化が見られたが）「その歩みにももどかしさを感じていた」

我が子と担任の
関係の変化

↓

「私自身の変化のきっかけは、我が子の変化」
「でも、まだ子どものことを認め切れていない」
「我が子に合う接し方を少しずつ考えるように」

小さな変化
我が子の変化

↓

「自分がやってみて、子どもができるようになった
という私自身の成功体験があったから」
「反応の変化に親としての手ごたえを実感した」
「私自身が変わったのだと思う」
「子どもに気持ちがあることを知った」

担任との密接な
話し合い

そして、この上記に表したプロセスを A さん自身が自らの言葉で語ってきた過程の中に、実はそれと同時に、親としての自身の変化を A さん自らが俯瞰していく働きがあったように思えてならない。そのプロセスを、先と同じように A さんの言葉をもって表すと、以下のようになってくる。

A さんの言葉

《我が子への気付き》

「子どもに気持ちがあることを知った」
「スキルではない「気持ち」や「思い」も大事だということを全く分かっていなかった」
「思いは誰にでもある。この子にだってある」
「思いの表現の仕方が独特な子と思えるようになった」



《自分への気付き》

「以前は、子どものことが分からなくて、逃げる・避けることをしていた。諦めていた」
「今は、原因を知り、「大丈夫だよ」と受け止めつつ、向き合っていくことを選んでいる」
「担任に聞いて、逃げないで、解決の道を探る感じ」
「でも、解決だけを求めてしまうと、子どもの気持ちがおいてきぼりになる」



《気付きから得たもの～内省・省察～》

「親が正しい頑張り方をすると、応えてくれる我が子がいる」
「我が子の気持ちを見ていこうと思う」
「でも、つい忘れがちな自分がある」
「出てくる行動の根底にある気持ちに気付くことが大事」
「親のペースで解決を焦ると子どもがおかしくなる。バランスが大事なことも分かった」



《親としての自己覚知》 と 《これからの私》

「私が変わらなくっちゃと思えたが、そういった思いは自然形成されるわけではない」
「自然と良好な親子関係が築けるものでもない気付けた」
「私は、親なんだからと思えるようになった」
「目の前のことから逃げずに、でも見つめ過ぎずに、ひたすら向き合うことでしか前に進めない」
「子どものことを知ることの大切さを本当に思っている」

こうしてみると、このプロセスには A さん自身が自らの内面変化を、自らの言葉によって腹落ちさせていくという働きがあり、その変化の中身は、「我が子理解へのプロセス」とも概観できるのではないだろうか。

更に、先の「我が子の特性(障害)を受け止め、親として向き合うに至ったプロセス」と、この「我が子理解へのプロセス」は継時的に見ると同じ流れ・同じ線上に位置するのだが、受け止める(受容する)に至るまでの継時においては周辺からの支援や後押しといった『親育て』の営みであったことが分かる。そして、その受容の先にあったのは、Aさん自らの内省や省察といった自分自身との対話があり、そこに『親育て』とは異なる『親育ち』があるように気付かされるAさんの言葉であったように思う。そして、この親育ちは、「親が、親として、親を生きる」ことの入り口に立つまでのプロセスになっているように思えてならない。

IV 考察～「親を生きる」を支えるために、何が大事になっていくのか～

今回、Aさんの言葉を通して親としての歩みを振り返る中で、改めて親への支援というものについて考える機会が与えられたと感じている。改めてAさんの言葉から「親支援」について考えたい。そこで、ここでは児童発達支援の場で比較的身近なものとして位置づけられているであろう、日々の伝達、見学や実習、親教室(親向けの勉強会)の三つについて考えていく。

① 日々の伝達について

「伝達の中で、相談することで前を向けてきた。療育は、子どもが5時間過ごすだけの場ではなく、私が成長するきっかけになったのが伝達だったと思う。これがなかったら、親として成長できなかった」

どの事業所でも、親への日々の伝達・連絡・報告等は日常の一コマであろう。当園でもそれは変わらず、更にコロナ禍にあっても、否コロナ禍だからこそ、保護者との伝達は省略・簡素化しないことを実践してきたわけだが、その実践をしてきたのは他にもない担任たちである。また、Aさんは「伝達では、本当のことを言って欲しい。子どもの良いことだけでなく、弱いところや苦手なところも伝えて欲しい」とも話されていた。そうはいつでも、その事実の共有・ありのままの共有が難しいのもまた事実である。しかし、子どもの実態や事実の共有、ありのままの共有無くしては、前に進まないことも感じている。だからこそ、

- a 子どもの具体的な様子やエピソードを共有しながら、
- b その見立てや読み解き、
- c そこから気づかされた子どもの内面等を共有していくこと

を丁寧に進めてきたこと、進めていくことの大切さがあったのだ。例えば、親との話しの中で「去年のクラスの時にはできていた」というような内容を聞くことはないだろうか。年度替わり、クラス替わり、担任替わりの際にしばしば出会うものである。親にしてみれば実際にできていた事実を見ているのだから、当然の言葉なのだ。だからこそ、「なぜ、いまできないのか」についてしっかりと話しを交えていくことが必要なのではないだろうか。親に子どもと向き合うことを願う私たちであるからこそ、療育に携わる者として、まずは自分自身が親と向き合うことを恐れずに、丁寧に向き合うことが必要なのだと気付かされる。

ただ、誰もが同じようにできるわけではない。ここにチームとしての支援力を忘れないでいたい。キャリアが浅いのであれば、aをもって丁寧に向き合おう。子どもとの付き合いが深まっているのであれば、bをもって親と向き合うことが可能かもしれない。親との信頼関係がしっかりと構築されているのであればcの付き合い

方を通して一緒に子どもの内面を考える作業ができるのではないだろうか。日々の療育の中で、子どもとの共有・共感を大事にするように、親との共有・共感が「親を生きる」ことを支えるはじめの一歩になっていくことを改めて心に留めていきたい。

② 親実習について

「一年目の実習では、出来ていないことに目線がいくばかりだった。二年目では、担任がどんな声掛けをしているのか、出来ない時や困っている時にうちの子はどんな表情をしているのか等に気付こうとする自分がいた。三年目では自分の目が変わったことを実感した。担任の対応にどんな意味があるのか考えて見学するようになった」

親支援の一環として支援の見学や実習機会を設定している事業所は比較的多いだろう。当園でも定期的な見学機会や年1回の実習機会を設定してきたこれまでがある。見学はその場面を決め、複数の親と共にマジックミラー室からの見学をすすめてきた。その際、その場面を見ながら、そこで見られた子どもの行動から分かることやその意味するところ、担任の働きかけの意図やねらいを解説することを心掛けてきた。また、親実習では、親が一日クラスに実際に入って子どもの様子を見学し、クラスでの生活を知ってもらい、子どもの様子を通して「我が子の、いま」を共有し、家庭生活に活かせる手掛かりを一緒に考えることや、担任の関りを見て、できることを取り入れることを目標としてきた。

Aさんは、一年目の実習では我が子のできていないところばかりが目についてしまっていたことを語っている。奇跡を信じて入園してきたAさんであった。それを考えれば「出来ていないことに目線がいくばかり」だったことも無理からぬものだと思えてくる。しかし、親であれば誰であれ、これと似た感情や思いを抱いて入園してくるのかもしれない。だからこそ、実際の我が子を客観的に見ていく見学や実習という機会には大きな意味があることを知りたい。

見学では子どもの姿を一緒に見ているからこそ、「今、〇〇を△△のやり方でやっていたね」とか、「今、担任の『〇〇します』の言葉を聞いて△△したね」というように、事実を共有することが可能である。実習であれば、実習後の担任との振り返りで「あの時、他の子たちは〇〇と言われたことに対して〇〇していたけれど、△△していたね」ということを共有した上でなぜ△△に繋がっていったのかを伝えていくことや、「△△していたから、□□に言い換えたなら、〇〇したね」というような共有が可能となる。このひと手間の有無がその先の親を変えていくのではないだろうか。

実際Aさんは、入園前の事業所見学に対して、「見学の際、子どもの様子を見ながら実例を挙げての説明や、やっていること、取り組んでいる活動の意味を説明してもらったことも大きかった。何気なくやっていること全てに意味があったのには驚きだった」とも語っている。だからこそ、見学は単に子どもの様子を見るに留まらず、文字通り『見て、学ぶ(見学)』機会でありたい。実際の様子を見ていく中で我が子の変化を目の当たりにするからこそ、それまで母が思っていた姿や家庭で見せる我が子の姿とは「今は違っているんだな」「変化しているんだな」という実感を持ち、その実感を重ねていくことが自分の持っている我が子像を修正していくことに作用していくのだろう。

更に実習に関して考えてみると、年1回の実習ではあるが、次の実習までには1年の時間が流れている。その時間経過の中では、担任と親との間で毎日の伝達が繰り返されており、見学も織り込まれている。単に実習だけで親の見方が変わっていったのではなく、伝達や見学といったアナログ的なつながりがあってこそその実習の意義ということも心に留めたい。

また、療育に携わる私たちは、「うちのクラスの子たち」という括りで子どもを見ることがあるが、親は、毎日我が子だけを見ている。療育に携わる私たちは、「ASD だから、そういう行動に繋がるのも当然だよ」という捉えで行動理解をすることもあるが、親は、障害のカテゴリーから我が子理解をするというよりも、我が子の行動理解があって初めて我が子の障害を腑に落とし、そこから本当の意味で我が子理解の道を辿るのかもしれない。Aさんは、「私自身の変化のきっかけは、我が子の変化」と語っている。しかし、その変化に対して「今思うと、とても大きい変化なのだが、当時の私はその歩みにももどかしさを感じていた」とも語っている。変化を分かりつつも揺れてしまうのが親なのだ。だからこそ、そこを支えるのが担任との話しの日々であり、その日々こそが、我が子に合う接し方を少しずつ考えるようになることを支えているのだということを忘れないでいたい。

③ 親教室について

「勉強する中で、受け入れられるようになってきた面もある。障害を受け入れることの一つにもなったのが親教室だった。病院で「あなたのお子さんは〇〇です」と診断をもらうよりも、少しずつ知る中で、「ああ、うちの子は〇〇なんだ」と受け止めていくことが出来た」

親教室(親向けの勉強会)については、第I章で見直しを進めてきたことを述べたが、ここではそれについて少し補足をしたい。

「すきっぷ」では、親教室の目的を「障害についての正しい知識を習得すること」、「我が子のあるがままの姿を見つめ、我が子を客観的に捉える」こと、「習得した知識を実践できるようにする」こととしている。そして、この目的のために、親教室の内容やその中身を見直してきたということになる。具体的にどういうことを指しているのかについて、「障害についての正しい知識を習得すること」と「我が子のあるがままの姿を見つめ、我が子を客観的に捉える」ことの二つから見ていく。

この二つの目的は関連しており、親教室での具体的な中身をもって連関していくことを想定しながら内容を考えてきたこれまでがあった。例えば、『障害について』といったテーマの内容であれば、その中身としては「知的障害とは」「自閉スペクトラム症とは」「注意欠如多動症とは」といったことについて触れ、『発達について』といったテーマ内容であれば、「運動発達」「認知発達」「社会性発達」といったことについて触れていき、それらについての正しい知識を分かり易く学ぶことを数回に渡って進めてきた。その学びが「我が子のあるがままの姿を見つめ、我が子を客観的に捉える」ことに繋がっていった欲しいと考えての組み立てであった。大概すればそれに相違はないのだが、一方で、進めてきた手応えの中に「しっくりこない」感覚が拭いきれないことも事実であった。親というものは、我が子についてカテゴリーを通して語られてもその理解にはつながりにくく、かえってそのカテゴリーの一部分に当てはまらない姿に気付くことで、それが小さな惑いや揺らぎとして親の内面にも「しっくりこない」感覚が横たわり続けるのではないかということを感じながらも、親教室の中身としてはカテゴリーを語ることを進めてしまっていたのだ。しっくりこなさの理由はそこにあるのではないかと考えての見直しという訳であった。

具体的には、障害についてカテゴリーで学ぶことはやめてみた今年度であった。その替わりとして、子どもの発達について、まずは「タテの発達」と「ヨコの発達」という観点から大きく見ていくことを共有し、その上で乳幼児期の認知発達の道筋を学んでいくことを軸にしながら数回に渡って中身を広げていくことを試みた。その広がりをもって、I章の中で親教室の見直しについて述べた「親は子どもの育ちや発達にはプロセスがあるということ」を学んでいく中で、常に我が子の姿を思い浮かべながら聴いているからこそ、そこから落ち

てしまう姿や浮きこぼれている姿に気付き、その姿こそが実は我が子の困り感や特性に通じていくことを感じ取っていく」ということに繋がっていくと考えてのものだ。見直しの結果は、まだ分からないのが正直なところではあるが、学び後のシェアタイムでは、我が子が見せている姿について「いま、この段階にいるから〇〇といった反応になっているんだなと思った」という言葉や「この段階に見られる〇〇が弱いということは、そこが育っていないということだから・・・、だからそう(障害)なんだなと感じた」といった言葉が聞かれる今年度だったように思う。

先に「日々の伝達」「見学や親実習」について考え、「親教室」も併せて三つの親支援について考えてきた。この三つは紙縊りのような関係性になると思うのだが、日々の伝達や、見学、実習は、担任らとの対話を通して我が子を直接的に見る働きがあり、親教室はそれとは少し質が異なり、知識や学びを通して我が子を俯瞰的に見る働きがあるのかもしれない。そう考えてみると、親教室の意義とは、相手との対話というよりも、自分との対話にあるのかもしれない。親が『親として生きる』上で、この「自分との対話」というものがとても大きな意味を成してくるとするならば、そのことを意図した親教室の内容・中身の模索がより求められていくのではないだろうか。

おわりに

「『親を生きる』を支える」というテーマで、Aさんの言葉を軸にしながらか園での親支援を見つめ直してきた。誰もがAさんのような歩みを辿っていくわけではないことも十分理解している。ただ、Aさんが辿ってきたこの軌跡は事実であり、これを通して励まされもした。

Aさんは、最後に「子どもを知ることの大切さを本当に思っている」と話し、この振り返りを閉じている。そして、この「子どもを知る」ことに伴走し続けたのは現場にいる担任たちである。自分たちの日々の支援が、親を生きることを支えてきたのだということと、これからの日々の支援もそれに繋がっていくのだということを伝えたい。

引用・参考文献

- ・「障害児通所支援ハンドブック」全国児童発達支援協議会(2015年11月)
- ・「乳幼児期の発達支援のすすめ方～「すきっぷ」の取り組み～」辻あゆみ・堀由美・松山明美・飯田雅子(2019年4月)